山岡鉄舟（三）

南條範夫

文春文庫　282—3

山　岡　鉄　舟（三）　定価 400円

1982年3月25日　第1刷

著　者　南條範夫

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102

TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

文春文庫

山岡鉄舟
(三)

南條範夫

文藝春秋

山岡鉄舟 (三) 目次

廃藩置県 7
牧民の官 52
宮廷出仕 97
征韓論 135
西南の役 175
無刀流開眼 221
春風館 266
鉄舟浮水上 307

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

山岡鉄舟

(三)

廃藩置県

中条金之助の茶畑開墾が契機になって、藩当局でも、領内荒蕪地の開墾による生産力増強に注目するようになった。

浜松奉行の井上八郎が、

――浜松の北方台地三方ケ原を開墾してはどうか、

と言う進言をしてきたのは、ちょうどその時である。

井上は鉄太郎の少青年時代の剣の師である。井上が藩庁にやってきて、詳細に開墾プランを説明すると、鉄太郎は即座に賛成した。

「先生、これはわれわれが話し合っていた計画にぴったりの案です。早速手をつけて頂きましょう。当初の経費については、藩庁の方で何とか計らいます」

「いや、山岡さん」

鉄太郎は昔の弟子だが、今は藩の権大参事である。井上は、さんづけで呼んでいた。

「必要なのは、開墾者をとりまとめ、適当に指図してゆく人物なのですよ。私の手許には、これと言う人物がいない。あんたの処から誰か世話して頂きたい」

鉄太郎は、この頃自分の家に転がり込んできている村上政忠（俊五郎）の事を、すぐに頭に思い浮べた。

「村上君ではどうでしょう」

「あ、あの勝さんの義弟に当るとか言う人物ですか」

「はい、村上は直情径行、少々乱暴なところがあるので、勝先生も手を焼いて自由に放置していますが、却ってあんな男の方が、開墾事業の統率には向いているのではありませんか」

「かも知れぬ。しかるべくお願いします」

鉄太郎の人物評価はかなり点が甘い。自分が善良なので、誰でも善良に見えるらしい。その上、人を見る場合、大抵の欠点には目をつぶって、美点の方だけを見る傾向がある。

村上と言う男、純粋ではあるが、社会的良識を欠いたところがある。勝は冷静にそれを見抜いて、あまり対手（あいて）にしなかったのだが、鉄太郎は例によって誰でも抱え込んで、

――あれも、いい男さ、

と思っているのだ。

三方ケ原開墾事業の統率者として、村上が任命された。

帰農希望の旧幕臣ばかりでなく、大勢の農民も動員して、大々的な開墾が始まる。

――開墾地は、開墾に従事した者に分配する、

と言うことを宣伝したので、希望者はかなり沢山集った。

しかし、開墾が始まってみると、色々むつかしい問題が生れた。

第一に、旧幕臣たちは、慣れぬ仕事なので、どうしても本来の農民たちと太刀打ちできない。農民たちは陰に陽に冷笑的態度をとる。それに堪え兼ねて、脱落してゆく旧幕臣が相つぎ、結局、

残ったのは専ら三方ケ原近辺の農民が大部分と言う状況になった。

第二に、これら開墾農民に対して、開墾中は相当の資金的援助をすることになっていたのだが、財政窮迫のため、ともすればそれが実行されないので、開墾農民の間に、次第に不満が鬱積してきたことである。

第三に、どこにでもいる煽動家が、ひそかに、この農民の不満を刺戟して、こそこそ動き始めたことである。

駿遠地方には旧幕時代に、本居宣長の国学が普及しており、戊辰の役に当っては、神官・儒者などが中心になって、報国隊・赤心隊などが組織され、官軍に従って各地に転戦した。

これらの連中は、全国的に戦乱が終って、故郷に戻ってきたものの、そこは今や徳川家の藩領となっているので、極めて居心地が悪い。

――官軍の御機嫌をうかがって、忠義立てをし、徳川家と闘った阿諛つかい、

と、悪声を放つ者も多い。居たたまれなくなって、東京へ移住してしまった者もある。

故郷に残留した者も、折角待望の王政復古の世が来たと言うのに、その先駆をつとめた自分たちが、世間から白眼視されていることに対して、憤りを禁じ得ない。

彼らの一人、三方ケ原に住む儒者津川蘭堂と言う男が、開墾農民たちの間に不満が漲っているのを見ると、早速これを煽動して、藩当局に対して日頃の鬱憤を叩きつけてやろうとした。

――村上はうまくお前たちを瞞しているのだ。お前たちをこき使って土地を開墾させた上、全部とり上げて旧幕臣たちに分配してしまうつもりなのだ、

と、農民たちの耳に毒をつぎ込む。

約束された資金手当がゆき渡らないので不平を言い出していた農民たちは、容易にこの言葉に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

動かされた。

――土地はおいらのものだぞ、

――約束通りの資金手当を出せ、

と言う主張を掲げて、三、四百人の農民が一揆を起した。

鍬や鋤を握って、村上の役宅に押しよせて来る。

村上の許にいるのは、十人余りの部下に過ぎない。これに開墾に従っていた旧幕臣二十人ばかりが急を聞いて集ってきたが、総勢わずか三十数名。

「村上さん、どうする。奴ら四百名を超えている。一気に押し寄せて来られたらとても防ぎ切れはせん」

と、一同、不安の色をあらわにした。

村上は、傲然として叫んだ。

「なあに、四百人だろうと五百人だろうと、たかが百姓の集り、先手をうって蹴散らしてやる！」

「大丈夫か、村上さん」

「任せておけ、みんな馬に乗れ、百姓共の集合地に、こちらから奇襲をかける」

全員乗馬、馬上鉄砲を放ちつつ、一揆の集合地に向って突入していった。

一揆側では、人数の少い村上の方から先に実力行動に出ようとは、夢にも思っていなかったらしい。

銃を放ちながら馬を馳せて殺到してくる村上ら一団の凄じい勢いに、一揆勢は気を呑まれ、抵抗するどころか、ちりぢりばらばらに逃げ出してしまった。

その中の何人かをひっとらえて、

――主謀は誰か、
と問い詰め、
――津川蘭堂
と言う名を聞き出した。
「くそッ、腐れ儒者め！」
村上は直ちに津川の家に押しよせ、蘭堂をひっとらえて、したたかにぶん殴る。
――叩き殺してやろうか、
と言う者もいたが、それは村上が止めた。
赴任に当って、鉄太郎から、
――どんな事があっても、領民を殺すな、旧幕時代とは違うのだぞ、よいか、この点だけは忘れるなよ、
と、繰返し言いふくめられていたからである。
だが、忌々しく思う点では、村上が第一なのだ。
「この腐れ儒者の読んでいる書物をみんな庭につみ上げろ」
と、書物を悉く庭に抛り出させた。
「こんな下らん本を読むから、下らぬことを考え出すのだ」
部下に命じて、その書物の山に小便をひっかけ、
「肥料をやったから、少しはましな本になったかも知れんぞ」
と放言し、陣屋に引揚げていった。
一方、一旦は四散した一揆勢も、そのままには引込んでいなかった。

少し落着いてくると、
――対手はせいぜい三十人位じゃないか、
――蘭堂先生を殴打し、大切な御本を汚すとは、呆れ返った役人だ、
――今度はこっちから押しかけろ、猟銃を集めて持ってゆけ、
と、再び大動員が企てられる。
この不穏な形勢を知った浜松奉行の井上が、愕いて急を静岡に報らせた。
――一揆勢現在六百、やがて千にも達すべし、
と言うので、藩庁でも平岡始め、
――困ったことになった、
と、腕を組んだが、鉄太郎は、
「とに角、私が行って、一揆方と何とか話合ってみましょう」
と引受け、単身、三方ケ原に向った。
村上の陣屋に行ってみると、紅白のまん幕が張りめぐらされ、門から玄関にかけて、抜き身の刀や槍を持った連中が警備しており、襖をとり払った座敷の真中に、床几を据えて村上がふんぞり返っている。
鉄太郎は、微笑した。
「大した勢いだな、村上君」
「あ、山岡先生」
村上が、さすがに照れくさそうに床几から立ち上った。
「いや、そのまま。村上君、さながら大将軍のように見える」

「ひやかさないで下さい」
と言った村上が、急に表情をゆがめて、寝小便をみつけられた子供のような顔になった。
鉄太郎が、つかつかとその村上の前にゆく。鉄太郎の巨きなからだの蔭に、村上の全身がかくれた。その蔭の中で、
「先生、頼む、何とかして下さい」
村上が、片手おがみにして、頭を下げた。
「どうしたんだね、村上君」
鉄太郎の方が、村上の態度の急変に愕いて、小声で聞いた。
「どうにもこうにも、虚勢を張って頑張っているが、どう始末をつけてよいか分らない。対手は六、七百から千人になろうと言う。この人数じゃ、どうにもならないでしょう」
「そりゃ、当然だ」
「だから、先生、何とかして下さい」
鉄太郎は、村上の耳許に口を寄せた。
「村上君、人を殺したか」
「いや、暴れ込んだ時、怪我人が多少出たかも知れないが、一人も死人はでていない筈です」
――よかった、
と、鉄太郎はホッとした。
旧幕時代とは違うのだ。領民を一人でも殺生したとなれば、大問題になる。
「人を殺してさえいなければ、何とか収められるだろう」
「有難い、先生、万事お願いします」

村上が、今度は、両手を合せた。
「よし、まあ、詳しい事情を聞こう」
村上は事の顚末を語って、
「騎虎の勢い、土百姓共めと思って馬を乗り出して蹴散らしたのですが、百姓たち案外しぶとくって――井上（八郎）先生でも助けに来てくれるかと心頼みにしていたんですが」
「井上先生は、事重大とみて、静岡に報らせに来られた。それで私が出掛けてきたのだ」
「あ、そうでしたか。何にしても、先生に来て頂いて助かった」
「その津川蘭堂と言う煽動者はどうしている」
「一旦は逃げ出しましたが――」
「とに角、その男に会ってみよう」
津川の家に行ってみると、津川は、村上に脅しつけられた上、事態が余りに大きくなり過ぎたので、蒼くなって茫然としている。もともと大した度胸のある男ではない。
鉄太郎が懇々と訓すと、
――申訳ない、軽率な言動を恥じています、何とか収めて頂きたい、
と、神妙な態度である。
津川に、一揆の代表者たちを集めて貰って、鉄太郎自ら、話し合うことにした。
――開墾した土地を、結局、取り上げられてしまうのではないか、
と言うのが、農民たちの最大の疑念なのである。
鉄太郎は、断乎とした口調で誓った。
「静岡県権大参事として、この山岡がはっきり諸君に約束する。開墾地は、開墾に従事した人々

のものになる。断じて取り上げるような事はない。私は嘘いつわりは絶対に言わぬ男だ。信じて貰いたい」

鉄太郎の噂は、この辺りの農民たちも聞いている。

——藩庁で最も真剣に領民のことを考えていてくれる人、

としての評価は浸透していたらしい。

「山岡様が、そこまではっきり約束して下さるなら、信じましょう」

と、一同が納得してくれた。

——初めに約束した必要資金の供給が滞っている、

と言う不満に対しては、鉄太郎も全面的にその事実を認めて、頭を下げた。

「全く申訳ない。資金の都合がつけば第一にこちらに回す。今の処、藩財政はどうにもならぬ窮乏ぶりだ。もうしばらく待って貰いたい。必ず初めの約束通りのことはする」

と誠心誠意、陳弁する。

その鉄太郎の衣服は、到底、藩庁の最高官吏である権大参事のものとは思われない粗末なものだ。

——山岡さんは給料のほとんどを、当然藩費で賄うべきところに充当しているそうな。

そんな噂を聞き知っていた者もいて、口から口へと、ささやかれると、百姓代表たちも余り強いことが言えなくなった。

「分りました。山岡様、私たちも苦しいが、何とか頑張ってみます」

と、どうやら話がまとまる。

鉄太郎は村上を解任し、次郎長に頼んで多少の資金を融通して貰って、この地の百姓代表たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com